

二〇二二年四月三〇日

リラの雨煉瓦造りの美術館
菓子舗より出てニアミスやつばくらめ
間延びする祈禱太鼓や目借時
目つぶしの日が貫きし庭若葉
工業地区条理を区切るつつじかな
役目なき老も参じる溝浚え
春愁や十二神将眉ひそめ
都草志貴皇子の碑訪ぬれば
雨音の間遠となりて囀れる
園庭に園児の数の鯉幟

凡士
あひる
なつき
菜々
素秀
みきお
もとこ
明日香
あひる
豊実

二〇二二年四月二九日

休耕田ポピーを分けて風の道
軍服の父の若さや昭和の日
立読みす書肆の店頭春寒し
風の香を土に鋤き込み代田搔く
片脚を山に預けて二重虹
音もなく野仏濡らす春の雨

素秀
こすもす
豊実
素秀
たか子
菜々

二〇二二年四月二八日

賑はへる日曜菜園豆の花
囀や陸墓は供花の桃源郷
高空に唄ひ雲雀のホバリング
ひとくちに香の弾けたる路地苳
教会の薔薇園に豆画伯たち
川風におしやべりやまぬ若楓
奥山の源流ここだ山つつじ
ペダルこぐげんげ浄土を左右に見て
鯉跳ねし波紋ひろがる未草
剪定の切り口香る穀雨かな
ピンクムーンとは気恥づかし月朧

はく子
ぼんこ
はく子
素秀
智恵子
むべ
宏虎
あひる
豊実
たか子
せいじ

二〇二二年四月二七日

尖塔にしばし留まる春の雲
黒ぼこを裏返しては夏支度

あひる
たか子

葉桜や妙見二里と標石

猿石の柔和な顔や畦青む
春愁やページ進まぬ書を閉じて
かをり愛でてと塀越えて木香薔薇

二〇二二年四月二六日

雑草の小花に憩ふ草むしり
春風に川波綺羅を揉みにけり
墜落と見るや雲雀の横飛びに
呉線に方言弾け春の海
藤揺れて嬰のおかつば撫でにけり
白雲を映す川面に春惜しむ
浦翔ける伊根の舟屋の軒燕
虚ろなる埴輪の眼春愁ひ

二〇二二年四月二五日

群青の空に溶けゆく雲雀かな
交代の母も空振り捕虫網
薫風や寺ヨガに堂明け放し
鶯のエチュードと聞く雑木山
子の網をひらりと躲す蝶機敏
ひさかたに菩提寺訪へば初つばめ
鯉のぼり離島に教師着任す
足伸ばす奥の院まで日永道
春昼や三線の音洩るる京の路地

二〇二二年四月二四日

御簾のごと雨に烟りし芽吹山
十字架を横へ縦へとつばくらめ
風やんで代田鏡に谷戸の空
少年の膝頭見せ夏近し
通院の一行日記四月尽
藤房を手に軽きとも重しとも
廃線の駅舎今年も燕来る

凡士
明日香
満天
菜々

せいじ
はく子
あひる
智恵子
なつき
満天
凡士
むべ

あひる
せいじ
はく子
せいでい
明香
せいでい
邑
宏虎
菜々
もとこ

明日香
あひる
隆松
素秀
たか子
なつき
凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年五月二日